

日本科学者会議 第1回 瀬戸内シンポジウム アピール案

瀬戸内をまもり、住民のための真の開発をめざして
にたにかおう

高度経済成長政策は、日本列島を公害のウズにまきこみました。いまや公害は、国民の生活と生命を日常不断におびやかすほど大規模で深刻なものになっています。

瀬戸内地域でも「新全国総合開発計画」のもとに、大企業に奉仕する住民不在の「開発」のテンポが一層早められています。そのために瀬戸内の自然と文化遺産は破壊され、大気や海水の汚染は急速に進み、住民の健康と生活にさす蔭は、暗さを増すばかりです。今こそ現状を深く分析して本質的な問題解決の方策を立てる必要に迫られています。

日本科学者会議の主催する「瀬戸内シンポジウム」は、こうした情勢のもとで、『瀬戸内の「開発」と公害』を主題として高松市で開かれました。ここでは自然科学と人文・社会科学の両分野にわたる科学者が、公害とにたにかう地域住民とともに、企業本位の「開発」の本質を究明し、外洋との海水の交流がすくなく、沿岸の人口密度が高い瀬戸内での公害が、どんなに危険なものであり、その危険にどのように対処せねばならないかを論じました。また、瀬戸内の汚染は全ての国民のものである豊かな資源を失なわせる点から、地域内だけの問題ではないことも明らかにされました。このシンポジウムを通じて、科学者および住民組織は、それぞれ瀬戸内を横断する組織的連携の場をつくることの必要性を痛感しました。それを保障するものとして「日本科学者会議瀬戸内委員会」及び「瀬戸内の環境を守る連絡会準備会」が結成されました。このシンポジウムは、瀬戸内公害反対のたにかいへむけて科学者と住民との連帯の出発点ともなりました。こうした連帯とその組織は、シンポジウムのもっとも貴重な成果といえるものです。

こうしているうちに、瀬戸内の公害は深刻化し、それに拍車をかける無謀な地域開発も進んでいます。いまこそ瀬戸内の自然をとり戻し、瀬戸内住民の生活と生命をまもるたにかいは、質量ともに飛躍的に発展させなければなりません。このたにかいのなかで、それぞれの専門を注かして科学者の活躍が大いに期待されています。

「瀬戸内シンポジウム」に結集した私たちは、このたにかいの失頭に立ち、たにかいの輪をひろげるために一層努力します。

瀬戸内の科学者ならびに一般住民のみなさん。

住民不在の「開発」と反対させ、瀬戸内をまもり住民の立場に立って真の瀬戸内開発を実現させるために、ともに力を合わせてたにかいしましょう。